

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red

Cross Kyushu International College of

Nursing

家族看護学の概念を取り入れた実践に対する訪問看護師の認識について：  
1つの訪問看護ステーションでの学習会の取り組みから

メタデータ	言語: ja 出版者: 日本赤十字九州国際看護大学 公開日: 2013-01-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 裕美, 樋口, 美代子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15019/00000086">https://doi.org/10.15019/00000086</a>

著作権は本学に帰属する。

報告

家族看護学の概念を取り入れた実践に対する訪問看護師の認識について  
— 1 つの訪問看護ステーションでの学習会の取り組みから —

小林裕美<sup>1)</sup> 樋口美代子<sup>2)</sup>

訪問看護では、家族への援助は不可欠だが、看護師の力量で実践しており、理論的根拠に基づいた実際に可能な方法論の構築が必要である。そこで家族看護学に基づいた概念の中から実践できる方法を見出したいと考え、その第 1 段階として家族看護実践への訪問看護師の認識を明らかにした。方法は、アクションリサーチに基づき、A 訪問看護ステーション (以下ステーションとする) で学習会 (6 回) および事例検討会 (4 回) を行い主題に取り組んだ。対象者は A ステーションの看護師 11 名でデータは学習会で出た意見や終了後の調査用紙とし、まとまりのある内容ごとに抽出し質的に分析した。記述内容は 92 で主題について否定的、肯定的な見方に分けられた。否定的な見方では、『訪問看護の場の特徴からの障壁』『看護師自身の家族への関わりに対する価値観』『実践する内容の難しさ』、肯定的な見方では、『家族看護学の重要性の認知』『系統立てて家族を見る重要性への気づき』『取り入れられる方法の存在』『自分の学習姿勢の変化』の categories を抽出した。家族看護学の概念は難しく実践には困難と受けとめ易い様であった。療養者へのサービス提供という明確な契約関係での人的、時間的限界、加えて看護師自身の家族への関わりに対する価値観が障壁となっていると考えられた。しかし、意図的な質問などを実践し始めた者もあり、看護師の家族への関わりへの価値観を変える取り組みの重要性が示唆された。

キーワード：訪問看護、家族看護学、アクションリサーチ

I はじめに

家族をひとつの単位として看護するという家族看護学は、1980 年代後半から北米を中心に発展し、日本においては 1990 年代からその概念が紹介され、注目されるようになった。それは、ますます進む少子高齢化や、家族の個人化、多様化により、家族の機能は低下し、現代家族は脆弱化してきており、健康問題を有する家族成員をかかえた家族への援助の重要性が認知されてきたためである。一方、訪問看護では、療養者の生活の場に入っていくために家族とその生活が見え、療養者への直接的な援助に加え、家族への援助は欠かせないものである。たとえば、介護に関する相談を受けたり、介護方法の指導をしたり、介護している家族の身体的、精神的健康に常に気を配りながら、介護負担の程度を査定し、必要に応じて介護負担への方策を提供するなどである。このような訪問看護の場面で

の家族への援助に関する方法論は確立されておらず、さまざまな状況にある家族員それぞれの生活様式や大切にしている事柄を把握しながら、経験も人間性も豊かである訪問看護師ひとりひとりの力量に委ねられて実践しているといえる。わが国における訪問看護での家族看護に関する研究では、事例に焦点をあてたもの<sup>1) 2)</sup>が多く、方法論の構築に関するものでは、石橋<sup>3)</sup>の在宅療養者の主体性維持の観点から家族に対する構造を述べていたものや、小林<sup>4)</sup>の 15 分以内でできる「Family interview」の日本における訪問看護への応用など数少ない状況である。このような現状から、訪問看護における家族への看護は、看護師の経験のみに頼ることなく理論的根拠に基づき、同時に実際に実現しやすい方法で意図的な関わりで実践を積み重ね、方法論としての構築が必要であると考えられる。

そこで、家族看護学に基づいた概念のなかから、訪問看護を実践している看護師自身が実践可能な部分を見出し、実現できる方法を創出していきたいと考えた。今後ますます在宅ケアが推進される状況のなかで、訪

1) 日本赤十字九州国際看護大学

2) なごみ訪問看護ステーション

問看護は在宅看護の中心的役割を果たしており、訪問看護における家族への援助方法の確立は、健康問題をもつ療養者自身および家族の生活の質の向上につながるものと考えられる。

## II 研究目的

家族看護学に基づいた概念の中から訪問看護で実践できる方法を構築するための第1段階として、家族看護実践に対する訪問看護師の認識について明らかにする。

## III 用語の定義

**認識**：認識とは、広辞苑によれば、「物事を見定め、その意味を理解すること」であるが、その理解のしかたや受け止め方とする。

**価値観**：ある物・物事にどのような価値を認めるかということについてのそれぞれの人の考え方で、行動決定の基になっているもの。

## IV 研究方法

### 1. 研究デザイン

アクションリサーチに基づき<sup>5)</sup>、1つのステーションにおいて実施した。アクションリサーチとは、実践と研究と理論を橋にかける研究方法で、①実践者と研究者の共同、②実践上の問題解決、③実践の場における変化の創出、④理論の発展という4つの要素をもっている<sup>6)、7)</sup>。本研究では、①の「実践者」とはステーションの看護師とし、②の「実践上の問題解決」は研究目的である家族看護学の概念を取り入れた実現可能な実践方法を見出すことで、第1段階として、家族看護実践に対する訪問看護師の認識を明らかにすることを主題とした。

1つのステーションにおいて家族看護学についての学習会および家族への対応が難しいケースの事例検討会をもち、主題に取り組んだ。

### 2. 対象者

Aステーションに勤務する看護師11名。

### 3. データ収集

データは、学習会で出た対象者からの発言や様子をフィールドのノートに書き留めたものと終了後の調査用紙とした。調査用紙の内容は、「家族看護学の概念を取り入れた実現可能な実践方法を見出す」という目

的を見据えた上での対象者の考えが出やすいように、①「家族看護学」について学習してみて②訪問看護で「家族看護学が活かせる点」③訪問看護で「家族看護学をとり入れるのが難しい点」④自分のステーション全体でできそうなこととした。しかし、どの質問項目の欄に書かれたものかを区別せずにデータとした。

## 4. 分析方法

データの記述内容をまとまりのある内容ごとに抽出し、質的に分析した。まず、1つのまとまりごとにコード化し、類似しているものをカテゴリー化した。

## 5. 倫理的配慮

対象者に、研究の目的・方法・自由意志に基づく参加やプライバシーの保護、学習会のみでの参加も可能ななど、口頭および文書で説明し、署名による同意を得た。また調査用紙は匿名で、個別返送とした。

## 6. 研究期間

2005年3～12月

## V 結果

### 1. 対象者の背景

対象の訪問看護師11名の年齢は、20代1名、30代5名、40代5名で、看護経験年数は、平均14.8年、訪問看護の経験が2.8年で、「家族看護学」についての知識は「はじめて聞いた」6名、「聞いたことがあるが学習の機会がなかった」4名、「講義を聞いたが覚えていない」1名で、全員が事前になかった。

### 2. 学習会の概要

家族看護学に関する学習会を計6回実施し、そのうち4回は事例検討も行った。1回の学習会は1～2時間で、知識の習得に関しては「ファミリーナーシングプラクティス(森山美知子編集、医学書院<sup>8)</sup>)」をテキストとしてその他資料も用いて研究者が主に講義形式で行い、事例検討は実際の利用者について行った。その概要を表1に示す。

### 3. 訪問看護師の家族看護実践への否定的見方と肯定的見方

データとした記述内容は、全部で92あった。これら1つ1つの内容が表2である。主題について大きく否定的な見方と肯定的な見方に分けられた。以下カテゴ

表 1 学習会の概要

年月日	講義内容	事例検討
2005/3/19	・日本の家族看護学の歴史的背景 ・在宅看護と家族看護 ・家族の定義 ・家族看護理論化の動き	訪問看護および居宅支援事業でフォロー中の 80 歳女性 (息子夫婦と孫 2 人の 5 人暮らし) の家族を事例検討
4/9	家族を理解するための諸理論 ・家族発達理論 ・家族ストレス理論 ・家族システム理論	実施できず
6/25	カルガリー家族アセスメント/介入モデルの基礎	訪問看護および居宅支援事業でフォロー中の 50 代男性 (父親と 2 人暮らし) の家族を事例検討
8/20	カルガリー家族アセスメントモデル 内的構造、外的構造のアセスメント 在宅応用を視点到	訪問看護および居宅支援事業でフォロー中の 94 歳女性 (長女と 2 人暮らし) の家族を事例検討
10/22	カルガリー家族アセスメント 発達・機能のアセスメント 在宅応用を視点到	実施できず
11/26	カルガリー家族アセスメント/介入モデル 在宅応用を考える 研究者の過去の事例 (疼痛コントロールがうまくいかず家族への関わりも不十分だったケース) についてカルガリー家族アセスメント/介入モデルの視点で事例検討	

表 2 92 記述の内容

	カテゴリー	サブカテゴリー
否定的な見方	訪問看護の場の特徴からの障壁	看護師がひとりで関わる限界
		限られた時間と契約
		家族がその場にはいない現実
	看護師自身の家族との関わりに対する価値観	なじまない日本の文化
		言葉ひとつで誤解をまねく危険
		読み取る家族の心の裏側
実践する内容の難しさ	実践に行かせる自信のなさ	
	理論の理解が前提	
肯定的な見方	家族看護学の重要性の認知	療養者と同様に重要と認知
		これから避けられない分野
	系統立てて家族をみる重要性への気づき	意図的な関わりでの学習成果
		理論的に考えることの大切さ
	取り入れられる方法の存在	有意義な情報が取れる方法と実感
		家族にストレートに聞く有効性を実感
		取り入れたいエコマップ
		多くの利用者への実践の有効性
	自分の学習姿勢の変化	自己の向上へのきっかけ
		今後の課題と実感

リー名を『』、サブカテゴリー名を「」で示す。

#### 1) 否定的な見方

表 2 に示すとおり、否定的な見方には『訪問看護の場の特徴からの障壁』『看護師自身の家族への関わり

に対する価値観』『実践する内容の難しさ』の 3 つのカテゴリーとした。『訪問看護の場の特徴からの障壁』には、「看護師がひとりで関わる限界」「限られた時間の契約」「家族がその場にはいない現実」などが

あり、『看護師自身の家族との関わりに対する価値観』には「なじまない日本の文化」に「言葉ひとつで誤解をまねく危険」「読み取る家族の心の裏側」などがあつた。

## 2) 肯定的な見方

肯定的な見方には、『家族看護学の重要性の認知』『系統立てて家族をみる重要性への気づき』『取り入れられる方法の存在』『自分の学習姿勢の変化』の4つのカテゴリーがあり、『取り入れられる方法の存在』には、「有意義な情報が取れる方法と実感」「家族にストレートに聞く有効性の実感」「取り入れたいエコマップ」「多くの利用者へ実践の有効性」があつた。

## VI 考察

家族看護学に関する学習会や事例検討会を通じて明らかにした訪問看護師の家族看護実践についての認識から、現実実践可能な方法を見出すいくつかの示唆をえるために以下の3つの視点から考察する。

- ① 看護師の家族看護における現任教育
- ② 看護職の家族介入能力
- ③ 訪問看護の特徴からみた家族看護

### 1. 看護師の家族看護における現任教育

家族看護学についての教育は、看護基礎教育にとりいれている学校もあるが、その多くが現任教育のなかで、関心の高い管理者や有志によって、学習や実践が行われているのが、わが国での現状と思われる。院内の集合教育に取り入れているものや、病院と大学が協力して家族看護研究会として活動しているなどの報告<sup>9)~11)</sup>みられている。小瀧<sup>9)</sup>らが院内研修の今後の課題として、個々の人権、尊厳を大切にしたい関わりを必要とする看護職は家族にどこまで立ち入って悩むことが多く、迷いや悩みは事例検討だけでは答えを見つけられないこともあり、臨床の場面で気づき学んでいくしかないと述べている。また、杉下<sup>12)</sup>の看護職者の家族看護についての認識の調査で訪問看護新任研修会を対象としたものは、家族を患者の背景としてとらえ、家族への援助のための能力や姿勢について自分には備わっていないと考える場合が多いとされており、本研究の対象者において家族に関わり深い訪問看護に従事しながら、全員が家族看護学についての事前の知識がなかったことや、結果の『実践する内容の難しさ』

の「実践に活かせる自信のなさ」に一致するものである。また、鳥居<sup>13)</sup>は、家族看護に対して関心が高い日本家族看護学会会員に調査したところ、家族をひとりの単位としてとらえ、家族看護についての意識は高いが家族へ働きかけるための力、家族への理解や関わる場が不十分であると考えているという結果であつた。

### 2. 看護職の家族看護介入能力

このように、家族看護への能力に関して自信がないと感じている看護職のなかで、訪問看護よりずっと以前から家庭訪問によって家族と接してきた保健師の家族看護介入能力についてみると、入江<sup>14)</sup>は、その重要性は認識しているが、実際その能力を適切な時期に用いることの難しさや不安をもっていることを明らかにしている。家族と密接なかかわりが取れる在宅においては保健師においても同様であることから、介入のタイミングの困難さが存在している。

### 3. 訪問看護の特徴からみた家族看護

#### 1) 訪問看護の場の特徴からの障壁

本研究の『訪問看護の場の特徴からの障壁』「限られた時間と契約」にみられるように訪問看護を利用している療養者との間には、「療養者へのサービスを提供する」契約関係があり、それを継続できるように信頼関係を築き、維持していくことが必要であり、療養者の健康問題に家族の複雑な問題が関連していると判断した場合でも、家族への介入は難しいという側面が存在していた。また、困難な問題を抱える家族の関係性に注目する「カルガリー家族看護アセスメント/介入モデル」は、「看護師がひとりで関わる限界」「家族がその場にはいない現実」などから受け入れにくいものだったと考える。

#### 2) 看護師自身の家族への関わりに関する価値観

結果より、『看護師自身の家族への関わりに関する価値観』が家族への介入を難しくしていると考えられた。看護師自身の家族への関わりに対する価値観とは、どのようなもので、どのように形成されたものが重要な鍵となると思われた。高見<sup>14)</sup>は、主に病院で働く看護者の家族看護観の形成に影響する要素として、日常のケアの戸惑いや看護者自身の家族体験など身近な事柄を振り返り、自己の家族看護観を知る必要があり、家族看護の実践の促進には、

ケアについて語り、意味づけされる場の提供の必要性を明らかにしている。本研究の対象者のなかには、「有意義な情報が取れる方法と実感」「家族にストレートに聞く有効性を実感」し、「多くの利用者への実践の有効性」を感じている者もあり、このような訪問看護場面での効果の体験を意味づけ、共有する学習会により、看護師の家族への関わりへの価値観を変える取り組みが可能である。

従って、看護師自身の家族への関わりに関する価値観が家族への介入を難しくしていたが、訪問看護場面での効果の体験を意味づけ、共有する学習会が必要だと考えられた。

考察した内容をまとめると、訪問看護師は、家族を 1 つの単位としてとらえる家族看護学の知識は十分でなく、介入のタイミングの難しさもあって実践に活かせる自信もないと認識している。また、限られた時間と契約という訪問看護の特徴にもその一因があり、家族の関係性に注目するカルガリー家族看護アセスメント/介入モデルは、受け入れにくいものであった。また、看護師自身の家族への関わりに関する価値観を変化させるためには、訪問看護場面での家族への意図的な関わりを意味づけ、共有する学習会が必要だと考えられた。

## Ⅶ 研究の限界と今後の課題

今回はアクションリサーチに基づき、1 つのステーションにおいて実施した取り組みの最初の報告であり、家族看護学に基づいた概念を取り入れた実践に対する訪問看護師の認識は限られた対象者からの結果である。しかし、1 つのステーション全体で実施したことに意義があると考え。今後、アクションリサーチの次の段階での②実践上の問題解決、③実践の場における変化の創出、④理論の発展というステップを進めていく必要があり、そのための課題として、以下の 3 点について取り組みをすすめていきたいと考える。

- ①訪問看護場面での家族看護に基づく意図的な関わりへの効果の体験を意味づけ、共有する学習会を実施する。そのためには、普段の訪問看護場面での効果を実感できるようなロールプレイを実施する。
- ②看護師自身の家族への関わりに関する価値観に焦点をあてて詳細を明らかにし、その変化をめざした方法を考えていく。

- ③家族看護学のなかでもカルガリー家族看護アセスメント/介入モデル以外の理論を使用する。

## 謝辞

今回の研究に協力して下さったステーションの管理者・スタッフの皆様にご心から感謝いたします。

本研究は、平成 17 年度日本赤十字九州国際看護大学学内奨励研究の助成を受けて行った。

また、結果の一部は第 13 回 日本家族看護学会にて示説発表した。

## 文献

- 1) 藤原聖子：自宅での介護に強い不安を持つ家族への援助. 家族看護, 1(1) : 164-170, 2003.
- 2) 芝田雅子：マッギール看護モデルを活用した在宅療養者の家族への看護. 家族看護, 3(2) : 114-119, 2005.
- 3) 石橋みゆき：訪問看護における家族看護を考えるー在宅療養者主体性維持の観点から. 訪問看護と介護, 7(6) : 464-470, 2002.
- 4) 小林奈美：訪問看護師による家族支援の確立を目指してー家族への問いかけの表現の検討ー. 保健の科学, 44(5) : 355-360, 2002.
- 5) Alison Morton-Cooper : Action Research in Health Care. 2000, 岡本玲子, 関戸好子, 鳩野洋子：ヘルスケアに活かすアクションリサーチ. pp54-84, 医学書院, 2005.
- 6) 峰岸秀子, 遠藤恵美子：看護におけるアクションリサーチ総説. 看護研究, 34(6) : 451-463, 2001.
- 7) 遠藤恵美子, 新田なつ子：看護におけるアクションリサーチ ミューチュアルアプローチの理論. 看護研究, 34(6) : 465-470, 2001.
- 8) 森山美知子編集：ファミリーナーシングプラクティス (第 1 版). 東京, 医学書院, 2005.
- 9) 石川福江, 新井陽子, 油谷和子他：カルガリー家族看護モデルを軸にした「北里家族看護実践研究会」の活動. 家族看護, 3(2) : 89-95, 2005.
- 10) 小瀧照子, 西川ひとみ, 野村弘美他：院内教育「家族看護コース」における取り組み. 家族看護, 2(1) : 128-133, 2004.
- 11) 下田美和, 佐藤昭枝, 黒田久美子：院内集合教育「家族看護コース」受講経験の意義. 家族看護, 1(1) : 152-157, 2003.
- 12) 杉下和子, 深堀浩樹, 小池敦也：看護職者の家

- 族看護についての認識. 家族看護研究、11(2)：69、2005.
- 13) 鳥居央子、森秀子、杉下和子：看護職者の家族看護についての認識—本学会会員の調査成績から—.
- 家族看護研究、9(3)：113—122, 2004.
- 14) 高見紀子、鈴木和子：看護者の家族看護形成に関する研究. 家族看護学研究、11(2)：67、2005.

## **The Perception of a Visiting Nurse for Family Nursing Intervention based on the Concept of Family Nursing**

Hiromi KOBAYASHI, MNS <sup>1)</sup> Miyoko HIGUCHI <sup>2)</sup>

Visiting nurses use their expertise to give support to a family at home. Consequently, we want to investigate what practical methods we can employ in family nursing. Initially, we want to clarify the perception of a visiting nurse for family nursing. In this qualitative study, we used an action research as an approach.

Part of our research comprised of six study sessions. Four more sessions, held in a visiting nursing station, were for case studies. The collaborators were 11 nurses who worked in the station. Data was collected during the sessions, including a questionnaire which was administered in the final session. We broke down the data into negative and positive viewpoint, and in all there were 92 items. Negative viewpoint consisted of three categories; “Barrier to the uniqueness of the home care field”, “The beliefs of the nurse and their effect on relation with a family”, “Difficulty to practice”. Positive viewpoint consisted of, “The awareness of the importance family nursing”, “The importance of assessing a family systematically”, “The application of taught methods”, “A change in one’s leaning motivation”.

There is a clear contractual relationship for a service between client and visiting nurse. In addition, we are feeling a lack of manpower and temporal limit. Therefore visiting nurses expressed ambivalence towards family nursing practice. However, some subjects had begun to practice family assessments at home.

We need to encourage their initiatives and plan our study sessions to help change the beliefs of visiting nurses towards family nursing intervention.

**Keywords: visiting nurse, family nursing, action research**

---

1) The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing

2) Nagomi Visiting Nursing Station